

同朋大学仏教文化研究所設立40周年記念シンポジウム

(司会) 皆さん、こんにちは。本日は同朋大学仏教文化研究所の設立40周年記念シンポジウム、「アジア仏教の死者・供養観」にお越しくださいましてありがとうございます。定刻になりましたので始めさせていただきます。本日の進行を務めますのは、本年度より研究所の所長を拝命いたしました安藤弥と申します。よろしくお願いいたします。開会に当たりまして、まず本学の福田琢副学長よりご挨拶を申し上げます。

(福田) 皆さま、こんにちは。福田と申します。本日は仏教文化研究所の40周年記念です。私は出身が埼玉県で、20歳代を中心とする10数年は京都にいました。それから30歳代に入った頃に職を得て名古屋に参りました。関東と関西を見てきて感じたのは、この名古屋といいますか、尾張三河、あるいは東海地方の地域の仏教文化は人々の生活に強く結び付いているということです。土徳というのでしょうか、生活に深く浸透していることに気づきます。

どうしてかというとお葬式やお通夜など、お寺さんに来ていただいております。月参りというときでも、当地の先生方は本当に価格破壊のようなことをやっておられます。月参りも熱心になさる。これが檀家とお寺との密接なコミュニケーションになっているのかなと思います。そういう文化を、仏教文化研究所はこの地域の中から掘りあげていく。

それと同時に、嘉木揚凱朝先生、ギャナ・ラトナ先生のような海外の研究者の方々と協力関係を構築し、「仏教」というキーワードで広くアジアを見ていくことも行っています。

一方、東海地区には東海印度学仏教学会があります。本日は東海印度学仏教学会と共催しております、2017年度例会でもあります。

先日幹事会が開催された折に話題に出たことです。東海印度学仏教学会は発足以来ずっと愛知県仏教会の支援をいただいております。もともとは決して学者だけの研究発表の場ではなくて、もう少し広く、仏教文化に関心がある人々に大きく門戸を開くような学会を目指していた時期もありました。けれども、学術機関として登録するというような事情もあって、ある時期から研究発表も論文も、大学院を出た専門的な研究者のものというふうになってきました。

けれどもそろそろ、現代社会のニーズに応えて、仏教や死生観といったものに関心のある人々に来ていただけるような会にしていこうということも、視野に入れていかなければいけない、というようなことを、先日の幹事会では話しておりました。今日のこの会がそのきっかけになればと思います。

40周年ということでも、私はその半分ぐらいしか関わっておりません。また武田先生のアジア仏教の班に入れていただいておりますが、名前だけで参加できておりません。本当に忸怩

たるものがあります。今日は蒲池先生、凱朝先生、ラトナ先生の話を聞きながら、ここにはいらっしゃらない方々、織田顕信先生、前田惠學先生、渡辺信和先生、といった既にお亡くなりになられた方々のご尽力もあってこの研究所の現在がありますので、そういった方々のお顔も浮かべながら、隅っこで皆さんと一緒に話を聞かせていただきたいと思います。長い時間になりますが、どうか時間の許す限りお付き合いください。どうもありがとうございました。(拍手)

(司会) さて、このシンポジウムは東海印度学仏教学会2017年度例会としても開催させていただきます。

ここで、企画の趣旨について簡単に説明させていただきたいと思います。同朋大学は浄土真宗系の仏教大学であります。昭和25年（1950）に前身の真宗専門学校から大学に昇格いたしました。初代学長の稲葉圓成先生が執筆されました学園設立趣旨には、仏教文化の交流が願われております。その設立趣旨に基づきまして、本研究所は「広く仏教文化の研究に寄与し、もって地域社会に貢献する」という基本姿勢のもと、昭和52年（1977）に設立され、そして本年度をもって40周年を迎えることになりました。

本研究所は、これまでにさまざまな研究活動に取り組んでまいりました。その中の一つにアジア仏教研究、アジア仏教文化研究というものがございます。近代日本仏教の大陸における活動に関する研究や、研究所の研究顧問をしていただきました前田惠學先生の収集資料をギャラリーに展示し、アジア仏教の実物資料を学ぶというような活動をしてまいりました。武田龍先生のアジア仏教研究会は、玉井威研究顧問もご参加されて、精力的に活動を続けておられます。

これとは別に蒲池勢至研究顧問を中心に、真宗文化史研究にも取り組んでおります。その活動の中で話題になるのが、葬送や死者供養という課題です。それぞれの立場からそれぞれの国や地域の事例を普段から語り合っているのですが、こうした議論が研究の場に乘せられて十分に紹介され比較検討されてきたかということ、なかなか十分な取り組みにはできてきませんでした。

その経緯を念頭におきまして、40周年で何に取り組むかと考えたときに、やはりこの課題が浮かびました。人間が死や死者とどう向き合い、どのような意識で、どのような葬送供養の具体的な実践を行うのか。また仏教はそれに対してどのような態度をとるのか。こうしたことをそれぞれの立場から紹介し、そして理解の共有を進め、この問題の考察の展望を探っていこうというのが今回のスタンスです。完璧な結論を出すということではなく、まずは議論を深め合っていこうということから始めてまいります。

そこで研究所に長らく関わり、ご支援・ご指導を頂いております2人の先生を海外からお招きいたしました。中国より嘉木揚凱朝先生、バングラデシュよりギャナ・ラトナ先生です。

当研究所の蒲池顧問を含む3人の先生方にそれぞれの地域の特徴を紹介していただき、そして客員所員の武田龍先生に司会進行をお務めいただく形でシンポジウムを執り行うというのが、今回のシンポジウムの基本骨子であります。時間も限られておりますので、スケジュールの方に入らせていただきたいと思います。

プログラム、スケジュールについてはお手元に配布しました資料の通りです。基調講演は1人30分で、場面転換含めて交代で5分の余裕を取っております。基調講演3本の後、休憩を挟んでパネルディスカッションを行い、4時半閉会を目指しております。長丁場になりますが、ぜひとも最後までご静聴いただきますようお願い申し上げます。

ギャラリーではこのシンポジウムに関係しました「仏・仏・仏」という展示をやっておりますので、併せてご覧いただきたいと思います。それでは、最初の講演に入らせていただきます。

日本仏教の死者・供養観

蒲池 勢 至

はじめに

蒲池と申します。本日はトップバッターで、日本仏教における死者と供養観についてお話しさせていただきます。私の専門はフォークロア（民俗学）でして、日本の葬送墓制については、ずっと関心を持って研究してきました。そして、仏教と民俗、とくに真宗と民俗について考えています。後に発表されるお2人の先生は、たぶん仏教と葬送儀礼の問題を中心に話しになると思いますが、私は葬儀後の供養で、遺体・遺骨・墓地・石塔など死者祭祀の「かたち」についてお話しし、日本仏教の死者観・供養観ですとか、現世と来世、浄土観・他界観についての特質をお話しできたらと考えています。

スライドを80点ほど持ってきましたので、具体的に「葬後供養のかたち」をお見せするのが目的です。レジメに史資料を載せておきましたが、時間が限られていますので一部しか見ません。とは言いまでも、最初に私が考えている課題から少し述べさせていただきます。

1. 日本仏教と死者供養の課題

課題の大きな枠組みとして、レジメに次の三つを上げておきました。

- (1) 日本の仏教は、いつから死者祭祀を始め、そして祖先信仰と深く習合して展開してきたのか。
- (2) 日本仏教は、死者儀礼と習合することによって庶民まで浸透できたのか。
死者・遺体・遺骨に仏教が関わることによって、浄土信仰が展開したのか
⇔遺体・遺骨を遺棄する底流⇒現代の葬送墓制
遺体・遺骨観念と仏教
死者祭祀の方法

(3) 仏教と日本人の死者儀礼との習合

⇒死者観・供養観・現世と来世・浄土観の特徴

そして、死者祭祀儀礼の成立について具体的な課題に、①出家者の葬儀関与・仏教式葬送儀礼の成立、②中陰儀礼の成立、③年忌供養の成立、④盆行事の成立、⑤舍利信仰と納骨儀礼の成立、⑥石塔墓の成立、⑦両墓制と無墓制、⑧家と先祖観の成立があります。

日本の仏教はいつから死者祭祀をはじめて、そして先祖を祀るようになったのか。これは大きな課題です。有名な事例ですが、平安時代中期、藤原氏の隆盛期であった権力者藤原道長(966～1027)と墓所についての史料を上げておきました。

- ①『栄花物語』巻15「うたがひ」(新編日本古典文学全集32『栄花物語』、小学館)

真実の御身を斂められ給へるこの山には、ただ標ばかりの石の卒塔婆一本ばかり立てれば、又参り寄る人もなし(下線は筆者。以下同様)

- ②「為左大臣供養浄妙寺願文」(新日本古典文学大系『本朝文粹』、岩波書店)

古塚累々、幽塚寂々、仏儀不見、只見春秋月、法音不聞、只聞溪鳥嶺猿、

- ③寛弘2年(1005)10月19日条、(大日本古記録『御堂関白記』)

只座此山先孝先妣及奉始昭宣公諸亡霊、為無上菩提、從今後、来々一門人々、為引導極樂也、

- ④寛仁2年(1018)6月16日条(大日本古記録『小右記』)

先祖占木幡山為藤氏墓所、仍奉置一門骨於彼山、

藤原氏の木幡墓所(京都府宇治市木幡)は、ただ石塔の卒塔婆が立ててあるだけで参る人もなく、仏教的な儀礼もなくして読経の声も聞こえない。それが寛弘2年(1005)には、一族の先祖が葬られていた木幡山に浄妙寺が建立されます。そして、これからは「諸々の亡霊の無上菩提のため」に参詣し、極樂へ引導するためである。寛仁2年(1018)には、「先祖は木幡山を占って藤氏の墓所となし、よって一門の骨を彼の山に置き奉る」とあります。

道長は寛仁3年(1019)に出家、同4年(1020)、京都市上京区京極辺に阿弥陀堂を建立して九体阿弥陀仏を安置しています。これを無量寿院と称しました。その後、法成寺と改称して金堂や五大堂・薬師堂などが順次建立され伽藍が形成されていきました。そして、自らの死に臨んでは、次の様であったとあります。

- ⑤『栄花物語』巻第18「たまのうてな」(新編日本古典文学全集32『栄花物語』)

うち連れて、御堂に参りて見たてまつれば、西によりて北南ざまに東向きに十余間の瓦葺の御堂あり。檼の端々は黄金の色なり。よろづの金物みなかねなり。御前の方の犬防はみな金の漆のように塗りて、違目ごとに、螺鈿の花の形を据ゑて、色々の玉を入れて、上には村濃の組して、網を結ばせたまへり。北南のそばの方、東の端々の扉ごとに、絵をかかせたまへり。上に色紙形をして、詞をかかせたまへり。はるかに仰がれて見えが

たし。九品蓮台の有様なり。あるいは年ごろの念仏により、あるいは最後の十念により、あるいは終りの時の善知識にあひ、あるいは乗急の人、あるいは戒急の者、おこなひの品々にしたがひて極楽の迎へを得たり。これは聖衆来迎衆と見ゆ。弥陀如来雲に乗りて、光を放ちて行者のもとにおはします。観音、勢至、蓮台を捧げてともに来たりたまふ。

仏を見たてまつれば、丈六の阿弥陀如来、光明最勝にして第一無比なり。烏瑟の御頭緑の色深く、眉間の白毫は右に廻りて、宛転せること五つの須弥のごとし。……また蓮の糸を村濃の組にして、九体の御手より通して、中台の御手に綴めて、この念誦の処に、東ざまに引かせたまへり。つねにこの糸に御心をかけさせたまひて、御念仏の心ざし絶えさせたまふべきにあらず。御臨終の時この糸をひかへさせたまひて、極楽に往生せさせたまふべきと見えたり。九体はこれ九品往生にあてて造らせたまへなるべし。

すべて臨終念仏思いつづけさせたまふ。仏の相好にあらずよりほかの色を見むと思しめさず、仏法の声にあらずよりほかの余の声を聞かんとしめさず、後生のことよりほかのことをしめさず、御目には弥陀如来の相好を見たてまつらせたまひ、御耳には尊き念仏を聞こしめし、御心には極楽を思しめしやりて、御手には弥陀如来の御手の糸をひかへさせたまひて、北枕に西向きに臥させたまへり。

藤原道長は万寿4年（1027）12月4日の巳の刻（午前10時ごろ）に入滅、胸から上は温かく、口を動かして念仏を唱えているようであったとあります。念誦の間で、九体阿弥陀仏の御手に結ばれた五色の糸を引き、阿弥陀如来の相好をながめ、念仏の声を聞きながら極楽に心を馳せて死んだのでした。法成寺の阿弥陀堂は、道長1人が極楽往生するために設けた、臨終の行儀を実践するための場であったと言えましょう。

葬儀と僧侶との関わりでは、仏教信仰に篤かった聖武天皇の場合、天平勝宝8年（756）に崩御していますが、葬送に関わったような僧侶の姿はみられません。病氣平癒を祈る「看病禪師」はいました。また、死去から四十九日まで京内諸寺院で供養の読経は行われました。しかし、葬送の役人としての僧侶の姿はありませんでした。道長よりも後、12世紀になりますと藤原寛子の葬送では『中右記』の大治2年（1127）8月15日条に「萬の事、皆僧をもって役人たるべき事」とみえています。10世紀後半から12世紀にかけては、また往生伝と奇瑞の時代でありました。有名な往生伝に、慶滋保胤撰『日本往生極楽記』（永観2年〈984〉）、鎮源撰『大日本国法華経験記』（長久年間〈1040～1044〉）、大江匡房撰『続本朝往生伝』（康和3年〈1101〉～天永2年〈1111〉）、三善為康撰『拾遺往生伝』（天永2年〈1111〉～保延5年〈1139〉）、同撰『後拾遺往生伝』（保延3年〈1137〉～保延5年〈1139〉）、沙弥蓮禅撰『三外往生記』（保延5年〈1139〉頃）、藤原宗友撰『本朝新修往生伝』（仁平元年〈1151〉）、如寂撰『高野山往生伝』（文治3年〈1187〉以後）などがあります。末法の世になり、各種往生伝と奇瑞の世界が展開しました。

さて、こうした流れの中で、改めて仏教は死者ですとか遺体・遺骨に関わるようになって浄土信仰が盛んになったのかと問いますと、必ずしもそうではなかったのではないかと藤原氏の墓所が荒れ放題であったところに浄妙寺が成立しましたが、貴族など上層階層はそうであったとしても、庶民などの一般社会では遺体や遺骨を遺棄するような状態が続いていたのではないかと。「墓地」が成立しても、どこに誰の遺体や遺骨が埋葬されているのか分からなくなるようなあり方でした。南北朝時代の地下人であった中原師守の日記『師守記』の貞和5年（1349）7月15日には、盆行事として二親のために霊供膳を供え、姉であった覚妙、妙心のために供えています。前日の14日には墳墓に詣でて二親の御墓に水を手向け、僧侶に阿弥陀経と念仏を読ませていました。「墓」というものが成立してきて、盆行事の墓参りを人々が意識するようになったのは、14世紀半ばから15世紀にかけての頃からです。全国の民間寺院が成立するのは、文亀から寛永年間（1501-1643）すなわち戦国末から近世初頭の1世紀半に成立し、ことに後半の天正から寛永年間（1573-1643）の約70年間に集中して成立しています。ということは、つまり、今日見るような死者を寺院が葬送儀礼を行い、遺体や遺骨を埋葬して墓を造り、「家の先祖」を祭祀する死者供養の形態が庶民に成立するのは16世紀以降のことなのです。

以上のことを前提として、これからスライドをお見せします。とくに墓と石塔の成立、どうやって寺院が墓と結び付いてきたのか、という視点からご覧いただければと思います。

2. 「墓」と石塔の成立—スライド—

写真No.1, 2は、滋賀県菅浦（西浅井町菅浦）の墓地です。菅浦は琵琶湖の一番北にあって、中世の菅浦文書で有名なところですが、かつては船でしか行けないような村で、訪れますと中世の村落がそのまま残されているような景観でした。村の東西の入口には四足門の茅葺き門があります。墓地は西門の外側にありました。ここは土葬の埋葬墓地で、埋葬地点の上には、朽ち果てかけていた木製塔婆が並んでいました。墓地の一角には蓮台付きの「南無阿弥陀仏」名号塔があり、ここが野辺の葬儀を行っていた跡です。石塔はほとんどありません。村の中には阿弥陀寺（時宗）・真蔵院（真言宗豊山派）・祇樹院（曹洞宗）という3か寺がありまして、阿弥陀寺の堂宇背後に石塔がありました。現代の角柱型石塔でしたが、一石五輪塔や小さい五輪塔、丸彫り型石仏もまとめられて安置されていました。この丸彫り型石仏は、京都の有名な化野念仏寺をはじめ市内の寺院境内にもみられるもので、年代は不明ですが中世的な石仏です。菅浦の墓制は、民俗学でいう典型的な両墓制の形態でした。西門外の埋葬墓地は「埋め墓」、寺院境内の石塔墓は「詣り墓」といいます。埋め墓は死者が埋葬されると、しばらくはお参りがあつたりしましたが、誰がどこに埋葬されたのか分からなくなりました。ですから、他の地域ではステハカ（捨て墓）などという呼称もありました。一方、詣り墓の

石塔墓は、墓下にはなにも埋められていないのですが、永続的に参詣する対象でした。埋め墓と詣り墓という形態がなぜできたのかといいますと、中世末期から近世にかけて石塔という文化が村に入ってきましたとき、従来からあった埋葬墓地に建てるのか、それとも寺院など別地に建てるのか、という問題が生じました。そのとき石塔という供養の文化を村がどう受容するかで、埋葬地の上に建立する単墓制と別地に建てる両墓制の形態に分かれたのです。滋賀県にはこうした両墓制がたくさんありました。

写真No.3、4は、奈良市内から柳生に向かう途中にある大慈仙の中世墓地（奈良市大慈仙町）です。山の斜面入口には新しい両墓制の墓がありましたが、さらに登っていくと律宗系の五輪塔があって周りに埋葬していました。14世紀中頃のものだと推定できます。そして写真No.4をみると、一段下の辺に近世の石塔が並んでいます。埋葬地の墓地に近世の石塔が結び付いていく様相がみてとれます。中世の大きな五輪塔は総供養塔としての意味でしたでしょう。

写真No.5～8は、静岡県磐田市にあった一の谷中世墓です。現在は破壊されてありません。雑木林の山を宅地開発で造成していて、昭和59年（1984）に発見されたものです。平安時代くらいから近世初め頃まで使われていましたが、江戸時代になると使われなくなり忘れられてしまいました。山頂の丘陵部に初期の土墳墓があって、在庁官人とか位の高かった人たちの墓がありました。ところが時代が下ると庶民の墓ができていきます。斜面をテラス状にして造られています。石また石で、どれが個人の墓なのかよくわからない。写真8などをみると、ちょうど賽の河原を連想します。石塔はほとんどなかったと報告されています。

写真No.9、10は、埼玉県ときがわ町（旧都幾川村）の板碑です。板碑はいわゆる墓ではありません。「造寺造塔」といわれますように、仏を種字や浮彫などにして供養祭祀する石塔として建立したものです。関東一円にみられた重要な中世資料です。だいたい親鸞滅後から出現しまして、そして近世になると造られなくなりました。墓塔として同型のものは近世にみられます。No.9は寛正5年（1464）の大日如来を表すキリク（種字）が蓮台の上にあり、蓮台の下には位牌型のなかに戒名が記されています。真宗史上で有名な大谷破却事件が寛正6年（1465）で蓮如の時代です。これは板碑の中では新しいものです。No.10は徳治2年（1307）の板碑で、蓮台の上に阿弥陀如来のキリクが彫られています。蓮台の下には梵字で何か記されています。真宗史では、本願寺第3代覚如の父親である覚恵が亡くなったのが徳治3年（1308）です。

No.11、12は、香川県多度津町佐柳島の両墓制です。No.11は詣り墓、No.12は埋め墓です。埋め墓は海の近くにあつて浜石が累々と積まれていました。どこに誰を埋めたのか不明になってしまうでしょう。

写真No.13～17は奄美大島、与論島の墓です。本土と比較すると仏教の影響が希薄な地域です。No.13は珊瑚で四角く囲った中に遺骨を入れる墓ですが、右手に本土の影響が入ってきた

文化の五輪塔があります。石は喜界島から運んできたものだと説明していました。No14も珊瑚で囲ったもので遺骨を埋め、その上は細かい白い珊瑚で覆っていました。石塔はありません。No15は奄美大島の南端・由井という村に残っている洗骨改葬した跡です。瓶（かめ）に遺骨を納めて石の蓋をしていました。洗骨改葬とは南島から台湾・中国南部にみられた民俗で、遺体を埋葬してから再び掘り出し、肉片を海水や泡盛の酒などで洗ってから再葬する民俗です。こうした形態が前の姿で、ここに石塔文化が入ってきて石塔墓が成立しようとしています。このことが、さらによく分かるのが与論島の墓でした。No16の墓地には遺体埋葬上に設置した輿と石塔と瓶が並んでいます。最初は遺体と墓上装置の輿だけです。3年すると洗骨改葬して遺骨を瓶に収め、輿は撤去してしまいます。写真No17の中段上に瓶だけがいくつか並んでいる形態がみえます。ところが、だんだんと本土の文化的影響を受けて石塔が建てられるようになってきました。

このように見てきますと、仏教と墓（墓地）が必ずしも結び付いていたのではなかった、ということがご理解いただけるかと思います。遺体や遺骨に対して仏教的な供養が行われず、放置され、時間の経過とともに忘れられてしまうものでした。遺体や遺骨に執着しなかったのです。それでは、死者に対して何も儀礼的な祭祀をしなかったのかというと、そうではありません。

写真No18, 19は、京都の珍皇寺（臨済宗建仁寺派）の「六道さん」と呼ばれる盆行事です。8月7日から10日までの間、京都市東山区にある珍皇寺にお参りして、オショライサン（お精霊さん）をお迎えするというものです。近くには六波羅蜜寺や西福寺もあって、この辺りは「六道の辻」と呼ばれ、古くは鳥部野という葬送地の入り口でした。珍皇寺境内の入り口には花屋が店を並べて、高野槇や仏花として蓮の花、蓮の実、橘、ミソハギ、ホオズキが売られます。新仏を祀るため盆棚の道具、供物なども店先に並びます。六道参りの人は、まず高野槇を買い求め、それから珍皇寺本堂前で「水塔婆」を買って先祖の戒名や名前を記入してもらいます。それから「迎え鐘」をつき、水塔婆を線香の煙にあててから近くにある石地藏の前に水塔婆を供えます。ここで高野槇を使って水を塔婆にかけます。これがオショライサンをお迎えするお参りの仕方ですが、この後、参詣者は高野槇を家に持ち帰ります。以前、六道さんにお参りすると、続いて清水寺奥の院のところにあるお地藏さんまでお参りしたものだといいます。家では仏壇に高野槇を供えた後、井戸に高野槇を吊して13日からのお盆をまつたものだと聞きました。珍皇寺の六道さんと同様な行事が、京都市上京区千本通りの引接寺（高野山真言宗）・通称千本えんま堂でも8月7日から15日まで行われています。

盂蘭盆会は、『日本書紀』推古天皇14年（606）や同齊明天皇3年（657）、同5年（659）に行われていました。天皇が群臣に詔して、京内の寺々に『盂蘭盆経』を「勧講（トカシメテ）」「七世父母の恩（メクミ）」に報いさせたなどとあります。平安時代にも貴族が一族の死者のために行っていますが、現在の民俗としての盆行事につながる民間の儀礼は、『吾妻鏡』

文治2年（1186）や『明月記』寛喜2年（1203）の記事など鎌倉時代からみられます。現行の民間盆行事が一連の儀礼体系として成立するのは、近世になってからです。

写真No20, 21は、三重県大王町波切の「大念仏」です。初盆に迎えた死者（新仏）の戒名や遺品を傘に吊して念仏を唱える盆行事です。写真No22, 23は、死者のおもむく霊山として有名な立石寺（山形県山形市）と後生車です。角柱型の塔婆で戒名を記した上に車（輪）があります。参詣者は死者供養としてこの輪を廻すのです。No24は、立石寺と若松寺（山形県天童市）で行われているムカサリ絵馬です。結婚することなく死んだ若者が、あの世で結婚式をあげている冥婚といわれるものです。韓国にも位牌同士で結婚させる冥婚があります。

こうした日本における死者供養の「かたち」は、他にもいろいろありますが、放置される遺体・遺骨・墓・墓地とは別に死者を供養してきました。仏教が死者や先祖を祭祀してきました。そして、14世紀半ばくらいから在地の武士階層などにも石塔墓ができるようになり、その前で読経したり供養したりするようになったのです。

3. 上座仏教と日本仏教の死者・供養観

日本仏教の大きな特徴は、死者や先祖を祭祀するという祖先信仰と習合して展開してきたことです。それでも遺体・遺骨にこだわらなかった時代があった、ということを墓や石塔の民俗を見ながらお話ししてきました。

いったい仏教にとって死者・死者供養との関係はどうなっているのか、と思います。この6、7年仏蹟巡拝としてインド、ブータン、スリランカ、ミャンマーなどを巡ってきました。上座仏教などでは、①墓がない、②遺骨にこだわらない、③遺体（身体）にこだわらない、④死後の供養はある、⑤盆行事などはない、⑥生まれ変わりの信仰が生きている、といったことを改めて知らされました。インドでは、イスラム教徒は墓を造りますが、その他は墓がありません。写真No25はベナレス（バラナシ）のガート（火葬場）で、火葬した後、遺骨や灰をガンジス河に流すのが一番望ましい葬法です。No26はブータンの火葬場、遺骨をパロ川などに流していました。No27はツァツァといって骨灰を土に混ぜて小塔を造り、岩陰などに安置していましたが、最後はヒマラヤの風に吹かれて風化してしまいます。民家の中には立派な仏間と仏壇がありましたが、死者に関わるものを安置して供養するということはありません。ブータンの寺院も同じで、死者を供養し祭祀するという性格は見られません。スリランカでは土葬したりする墓地もありましたが、すぐに放棄されるような感じでした。高僧の遺骨を舍利として納めたハカや仏塔はありますが、庶民の遺体や遺骨を供養するような装置はありませんでした。

ミャンマーでは、人が亡くなると死後7日目に葬式を行います。「亡くなる1分間の志で生まれる世界が変わる。善いところへ生まれるには、お経を聞かせることと騒がないこと」[ド

キッとしたら多くの功德を積んでいても、善いところへ生まれることができない」と聞きました。死後7日間は「死んだ人は生きている」と言って食事を出します。そして、7日目になると「最後の日ですよ」と言って、3～5名の僧侶を招待して葬式を行います。僧侶を招くのは、「死んだ後、善いところへ生まれ変われるように」ということからだと説明されました。葬儀後、1か月、1年と僧侶を招きますが、その後は各自の自由とされています。「死後も、持っていくべきものは功德である」といわれ、「供養はシェア（分配）するもの」という考えが強いようです。例えば、仏塔の前にはよく鐘がありますが、「1打は地獄界へ、2打は人間界へ、3打は天国界へ布施します」ということで打たれます。死者は「どこかに生まれ変わっているはず」で、地獄などに生まれて迷っている者は、遺族の供養によって脱することができるのです。ヤンゴンには火葬場が2か所あります。遺骨をどうしているのか聞きましたら、「遺骨は火葬場に任せてしまうから、どうなるか分からない」と答えてくれました。そして7割が火葬で、「生まれ変わるのでお墓にお参りする必要はない」とのことでした。ハカ（墓）という観念がほとんどありません。土葬の場合は、かつて村の外にありました。埋葬すると土饅頭にし、裕福な者はセメントで固めたそうです。

このように上座仏教のところでは、仏教と遺体・遺骨・墓との結びつきが、無いとは言いませんが非常に希薄です。それなりの死者に対する供養はありますが、これは善処に生まれ変われるようにという意味からです。No28はミャンマーのバガンにあるシュエジー・パゴダで黄金の仏塔でした。地獄界・人間界・天の世界・神の世界（教えと功德の世界）・涅槃界という世界観を象徴的に造形した仏塔で、礼拝対象としての仏塔信仰です。そして救済者としての釈尊信仰が強烈にあり、また現実には僧院で修行している出家者・僧侶の姿が眼前にあります。死者および生者に対して「悟りの世界」のイメージが形成されていて、人々は「悟りの世界」を求めて信仰しています。「浄土」が説かれなくても、生者や死者が目指すべき世界があるのだらうと思いました。

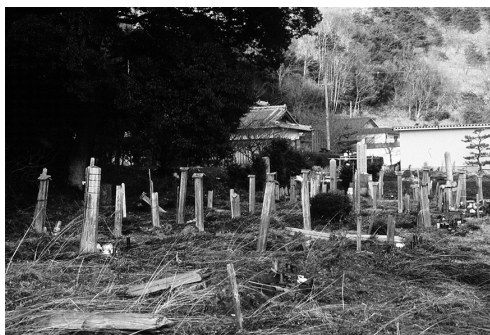
日本仏教ではどうでしょうか。阿弥陀如来の浄土が説かれましたが、結局、死者を供養し先祖を祭祀することが仏教になってしまったのです。遺体や遺骨を埋葬して墓を造るのは、中国・韓国・日本・台湾など儒教文化圏に見られます。ベトナムなどにも墓はあるようです。中国から伝えられた日本仏教は、最初から「七世父母」の恩に報いるというように儒教と一緒に受容しました。日本の葬送儀礼なども、非常に儒教的な影響を受けているようです。また、民俗的に見れば日本人の他界観は、山や海の彼方に死者のゆく世界があって、現世の延長上にあるような観念で捉えられていました。死者は供養することによって成仏し、盆や正月あるいは彼岸のとき、ホトケ（祖霊）は定期的に来世から現世に訪れてくるものだと信仰されてきたのです。

おわりに

最後に私の好きな墓の写真№29、30をお見せします。岐阜県旧徳山村にあった真宗門徒の墓です。村の入口にあって丸石だけでした。あえて石塔を建てなかったのです。石塔を建てなかったり、遺骨を放置するような真宗門徒の民俗は各地に見られました。遺体や遺骨を埋葬することなく本山納骨や手次寺に納骨だけして、家単位の墓を造らなかったのが「無墓制」でした。概して真宗は、遺体・遺骨や墓の供養といったことに重きをおいてきませんでした。現代は「墓じまい」で樹木葬や納骨型の室内墓苑が流行しています。仏教と石塔墓の結びつきがなくなりつつあり、墓としての石塔の時代が終わり始めたのかもしれませんが、しかし、どう死者に対峙したらいいのかという死者観も壊れてしまいました。仏教は死者や葬儀・墓をどうするのかということが問われています。

【参考文献】

- ・田中久夫「平安時代の貴族の葬制―特に十一世紀を中心として」(同『祖先祭祀の研究』弘文堂、1978年)。
- ・田中久夫「仏教と年忌供養」(『講座 日本の民俗宗教』2、弘文堂、1980年)。
- ・岩田重則『天皇墓の政治民俗史』有志舎、2017年。
- ・臈谷寿『平安王朝の葬送』思文閣出版、2016年。
- ・大津透・池田尚隆編『藤原道長事典』思文閣出版、2017年。
- ・竹田聴洲『民俗仏教と祖先信仰』東京大学出版会、1971年。
- ・蒲池勢至『民衆宗教を探る 阿弥陀信仰』慶友社、2010年。
- ・蒲池勢至『お盆のはなし』法藏館、2012年。



No. 1 滋賀県長浜市菅浦
の埋葬墓地 1999年



No. 2 同 阿弥陀寺境内の石仏



No. 3 奈良県奈良市大慈仙の
中世墓地・律宗系の五輪塔



No. 4 同 中世墓地の下段に近世の石塔



No. 5 静岡県磐田市
一の谷中世墳墓群 1987年



No. 6 同 丘陵部の土墳墓



No. 7 同 斜面テラス状の墓



No. 8 同 石また石・庶民の墓



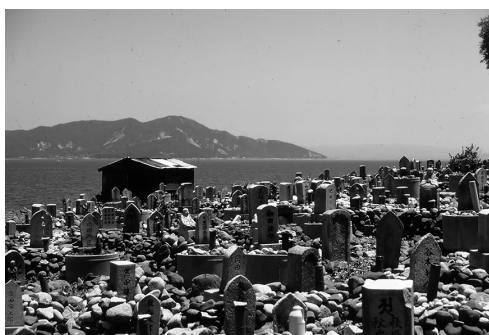
No. 9 埼玉県ときがわ町の
板碑・寛正 5 年（1464）大日如来キリク



No.10 同 徳治 2 年（1307）
阿弥陀キリク



No.11 香川県多度津町佐柳島の
両墓制・詣り墓の石塔



No.12 同 埋め墓
石塔は俗名を刻した新しいもの



No.13 鹿児島県奄美大島の墓



No.14 同 珊瑚で囲い埋葬、
上に珊瑚の小片が撒かれていた



No.15 同 油井



No.16 鹿児島県与論島の埋葬墓上施設



No.17 同 洗骨改葬した瓶と新しい石塔



No.18 珍皇寺（京都市東山区）
の「六道さん」



No.19 同 高野槇で塔婆に水を掛ける



No.20 三重県大王町
波切の盆「大念仏」



No.21 同 カサブクに死者の遺品と
戒名を吊す



No.22 立石寺（山形県山形市）
死者のおもむく霊山



No.23 同 後生車の塔婆



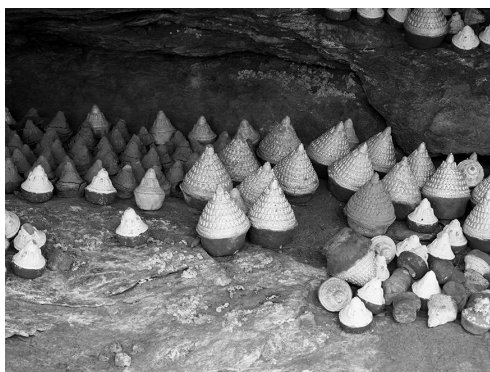
No.24 ムカサリ絵馬
(山形県天童市・若松寺) 死者婚



No.25 インド・ベナレス
のガート（火葬場）



No.26 ブータンの火葬場 2014年



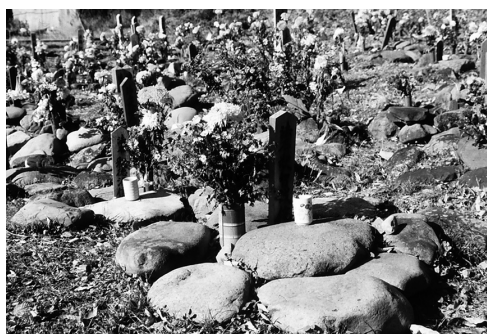
No.27 同 ツァツァと呼ばれる小塔



No.28 ミャンマー・バガン
のシュエジー・パゴダ



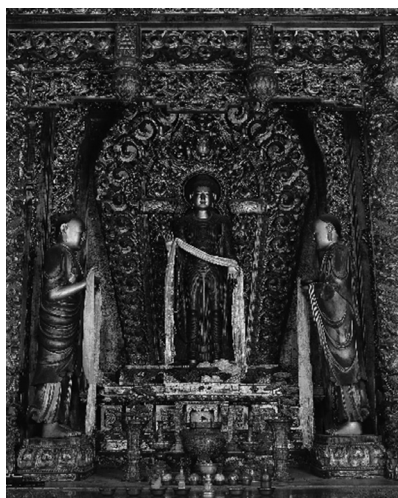
No.29 岐阜県旧徳山村の墓地 1984年



No.30 同

中国仏教の死者・供養観

嘉 木 揚 凱 朝



皆さん、こんにちは。こちらに長くお世話になり、愛知学院大学でも修士課程、博士課程を修了しました。その後、同朋大学で中村先生と一緒に研究を続け、現在も同朋大学仏教研究所で、客員所員として在籍しております。そして私は今、中国社会科学院世界宗教研究所にて研究しております。今日は「中国における死者・供養観」というテーマのもと報告をさせていただきたいと思います。人間にとって、この世界に生れて対処しなければならない最大の問題は、「生と死」であると考えます。「有生必有死」つまり、生が有れば必ず死が有ります。無論それは

例外無く、即ち富人であれ、貴族であれ、高い地位であれ、或いは貧乏であれ、地位が低いであれ、男子であれ、或いは女子であっても、すべて同様にこの問題に直面しなければなりません。これが「生死」の事実です。私たちは、どのように如何に正しく「生死大事」を認識し、究明しなければならないのでしょうか。それについて『宝曼論』では「十善」を実行することが、「生死大事」を解決する基礎であると説いています。

つまり、悪業を行えば、諸々悩みに通じ、従って悪道に堕ちる。善業を行えば諸々の安樂を成就することになり、生々世々ですべてが安樂となるということです。つまり、「十善」を執り行う者は、自にも他にも一切の功德を与え、「十不善」を行う者は、自他両者に害悪を与えるのです。

第一に死について考えるとき、「生」を如何に正しく認識するかという問題があります。人間として生れるのは難しいことです。たとえば『阿含経』の中に盲亀浮木の譬えがあります。百年に一度水の上に出てくる目の見えない亀に偶然木が当たるという説話です。それくらい難しいことです。

仏教の基本の教えは、「三世因果」を説いています。だから私たちも人間として生まれ、この業によって生きています。業によって生きているということは、必ずいいことを行った

からこの体をいただいていると思うんです。だから、私たちの先世が行ったことを、これを感謝しなきゃならない。そして、今世でも仏教の法などを聞いて、また、いい先生に出会って、いい法に出会って、いい仲間に出会って、これを大事にしなければなりません。つまり「一日不作、一日不食、一日一善、日日是好日。」です。このような正しい生活の心を持ち、徳を積み善を行い、国土と衆生に対し報恩感謝の気持ち行動を為して毎日を過ごすのです。

第二は、如何に正確に「死」について認識するかということです。周知のように「生老病死」は、自然の法則であり、苦を離れ楽を獲得して成仏する以前には、誰もが避けることができない苦としての「生老病死」の事実があります。

「死」について、ツォンカパ大師が著した『ラマリム（菩提道次第廣論）』に、次のように説かれています。「死神」がやって来る時に、親戚であれ友達であれ、親しい仲間であれ、大きな財宝であれ、死ぬ際に、俱生としている身体にとって何の役にも立たないのが事実であると。しかし「仏法」だけは、死者にとって唯一の役立つものであると説かれています。これを「法宝」と言います。ですから死に往くときには、煩惱障と所知障を取り除くことが大切です。

それをどういうふうに取り除くかと言えば、人が亡くなった後、モンゴル仏教では、お坊さんたちが四十九日の内にお経などを读みます。モンゴルでは、死んだ後、お経を読まない、極楽に行くことはできないと考えられています。そのような様々な「生死大事」の問題を解決する方法を明らかにしているのが『上師供養儀軌』です。

仏教を修学する人の第1歩は、多くの仏典を読んで仏法を理解することであり、すべて善知識（者）はその知識によって仏道修行を行います。第2歩は、読んだ仏典を体解、体得し、明らかに善悪の因果を区別することができるようになります。そして第3歩は、教理を「如理如法」に修学し、「学仏行仏」を目的とします。第4歩は、すべての修行の成果をもって、仏法を弘揚し、衆生を普く救済します。このようにすれば、「信、解、行、証」の目的に至ると考えられています。

このように修行すれば、「生死大事」の問題を解決できると考えられています。また『菩提道次第廣論』では「出離心」と「正見」を合わせて修行すれば、必ず阿羅漢になるとも説かれています。これを基礎として「菩提心」と「正見」を合わせて修行すれば、成仏することができるわけです。こうして、修行することによって煩惱障と所知障を断ずる円満、即ち「三大円満である断円満、証円満、利他円満」に達できると説かれています。

だから前田先生も亡くなる前に、いつもそういうふうにおっしゃっていました。「凱朝さん、仏陀と如来は違いますよ。仏陀は自分自身が悟りを開き、それから、衆生利益のために働いたのですよ」と。前田先生はそういうふうに教えてくださったんです。

モンゴルで「聖者」と言えば、天意・天命を受けた高僧です。聖者をモンゴル語で「ホト

クト」(Qutugtu 呼図克図)といいます。モンゴル仏教では、浄土へ往き、浄土から人間界に再来する人を「乗願再来」として活仏と呼びます。これがホトクトです。モンゴルの地で信仰されている仏教の最大の特徴は、僧侶の在り方にあります。モンゴルでは、僧侶は釈尊の再来とされ、釈尊の再来である僧侶の中に上師があり、上師の中に活仏があります。

仏教がモンゴルの地に伝来した後、寺院は、民衆にとって浄土であると信じられてきました。高僧たちを「仏・菩薩」の再来であると信じ、モンゴル人は、これらの高僧をモンゴル語でホトクトと尊称してきたわけであります。

例えば、家族の1人が亡くなると、その家族は、先ず寺院を訪れ、僧侶に依頼して、死者のために法要を行います。その場合信者は、「ラマバクシ（日本語で、お和尚さん）、私のお爺さんが、Burqanbolqugsan、つまり、成仏した。お経を読んで頂きたい」とお願いします。死者の家を訪れた僧侶は、『往生極楽浄土願』などの仏経を読誦し、それ以後、七七・四十九日まで、寺院で法要が営まれます。

現在、浄土思想は、モンゴル国・ブリヤートモンゴル自治共和国・中国内モンゴル自治区・遼寧省・吉林省・黒龍江省・新疆ウイグル自治区・甘肅省・青海省・寧夏回族自治区・河北省・河南省などのモンゴル族自治県にまで及んでいます。

一般の民衆は、亡くなったら、本当に浄土に往生し成仏できる Burqanbolqugsanと信じています。モンゴルの僧侶は、一生を通して、毎日それぞれが選択したご本尊の経典を念誦し、経典を念誦して積んだ善根によって、僧侶は臨終の時、浄土往生し、成仏Burqanbolquできると堅く信じています。

民衆が、僧侶に依頼して経典を読誦してもらう理由は、先ほど述べたように、モンゴル仏教では、僧侶が、釈尊に代わって釈尊が説いた教えを民衆に読誦することにあります。民衆は、日常生活の中で、知りながら、あるいは、知らない間にいろいろな罪惡を造っているから、修行を達成している僧侶によって法要をしてもらえば、必ずその罪惡を浄化することができるかと確信しています。もし、僧侶にこのような役割りができなければ、民衆はわざわざ浄土であるとされる仏教寺院を尋ね、僧侶に懺悔儀式などを依頼する必要がないものと考えらるでしょう。

モンゴル仏教の活仏制度が今日まで伝承されてきた理由は、この点にあると考えます。モンゴル人は、モンゴル仏教の高僧ターラナータ (Tāranātha 多羅那它) を、兜率天の浄土に住している弥勒仏の化身とされるジェブツンダンバ・ホトクトとして篤く信仰しています。モンゴルでは、『兜率天上師瑜伽法』(dgah ldan lha brgya ma) と『往生西方極樂世界』によって修行すれば、あるいは人に読誦してあげることによって、人は必ず兜率天の浄土や、西方にある阿弥陀仏の極樂浄土に往生することができると信じられています。

モンゴル人は、臨終の時、一生涯で造った「罪惡」を懺悔し、浄化しないと、阿弥陀仏の極樂浄土に往生することができないと信じています。だから、臨終に際しては、必ず自分の

家に僧侶を招いて読経してもらうわけです。モンゴル人は、生前の「罪惡」を浄化することによって、福德を得ることができると考えています。

だから、モンゴル人は、五体投地をして、觀世音菩薩のオム・マ・ニ・ペ・メ・フン（Om ma ni pad me hūṃ 唵嘛呢叭咪吽）の六字真言を称えながら、仏教の聖地五台山まで巡礼する光景が、今日でも見ることが出来ます。モンゴル仏教では一般的に、觀世音菩薩の六字真言オム・マ・ニ・ペ・メ・フンによって罪惡を懺悔すれば、罪惡を浄化することができると考えられています。モンゴル仏教では、オム・マ・ニ・ペ・メ・フンの六字真言は、一切諸仏の密意を一つにまとめた本質を表わしているとも言われています。すなわち八万四千の法蘊の根本を一つにまとめた真髓であり、一切の善業と功德の源泉であり、一切の利樂や成就の根本であり、善趣と解脱の聖道であると考えられているのです。

従って、この觀世音菩薩の六字真言オム・マ・ニ・ペ・メ・フンを一生涯唱え続ければ、罪惡を浄化し、苦しみを取り除くことができるとされています。また、一生涯に一度だけでも、モンゴル人が浄土として信仰するチベットのラサヤ、青海省のグブン寺（skuḥ bum byams pa gliṅ 塔爾寺）や、山西省の五台山のいずれかに巡礼参拝して、過去の罪惡を浄化すれば、来世には必ず極樂浄土や他の浄土に往生し、成仏できると信じられています。

葬儀に関しては、一般の大乘仏教徒の多くは、死を成仏とか、往生とかと呼んでいます。モンゴルの地の葬法としては、自然葬・火葬・土葬・水葬・風葬が古くから行なわれてきました。モンゴルでは、人の死は、肉体は人間界に残り、ソーニスー（sunisu）・靈魂だけを他の浄土に移すことであると信じられています。

モンゴルには、「生まれる時は秘密の生殖器から、死ぬ時は顔から」という諺があります。つまり人は、女性の生殖器から生まれるが、死ぬ時は顔にある両目が閉じることによって死ぬということです。

そして死体は、門からは出さず窓から出します。なぜかと言えば、その理由は、昔はモンゴル人が住むところは、羊の毛でつくったテントだけでした。テントの窓は天井にある。モンゴル人の意識では、人の靈魂は、天井から浄土に行くと考えているから、死体は、窓から出すのです。死者の靈魂は、死亡した場所に3日間残るとも言われています。

また、モンゴルでは、死者を足から頭まで全身を白布で包みます。これは、モンゴル人が、白色は善業を指すと信じていることによります。つまり、白布で死体を包んでおけば、来世は必ず浄土に生まれることができると信じているからです。白布で死者を包む作業は、男性の手によって行われますが、この男性は、死者と同じ十二支での生まれた人でなければなりません。死後2～5日の間に、死体は、4人の男性によって棺の前後を紐でつり下げて山や森や荒野へ運ばれます。そして死者の息子が、先ほどのオム・マ・ニ・ペ・メ・フンという觀世音菩薩の真言を書いた白布を、切り取った柳の枝に掛け持って先頭に立って進んでいきます。それを、モンゴル語でマニ・エグルグ「maṇi egurgu」と呼びます。さらに女性の同

行は、禁止されています。

山や森や荒野に運び、そこに捨てられた死体に、霊魂が残っていれば、動物もその死体を食べないと信じられています。従って、屍肉の喰われ方で、死者が往生できたか、まだ往生できていないかが分かるようになっているのです。死体が動物に喰われれば、それによって死者は福德を積むことになります。それは、動物たちが一時期にしても、腹一杯喰えれば、狼のような大きな動物が、他の小さな弱い動物を喰うことはないと考えられているからであります。

また人間の霊魂だけが天界や極楽浄土などに行くことができ、もし肉体が残れば、死者の霊魂は肉体に執着することになり、それが浄土往生の妨げになるとも言われています。こうした理由で、肉体を動物に喰わせることが、大切な浄土往生の方法とされるのが、モンゴル仏教徒の浄土思想の特徴であります。

もう時間になりましたので、ここで終わりにしたいと思います。

ありがとうございました。

バングラデシュ仏教の死者・供養観

ギャナ・ラトナ

(ギャナ・ラトナ) 皆さん、こんにちは。私はテキスト的な話の後で、現在のバングラデシュで生と死がどのように考えられているか、死後には供養や法事がどのように行われているか、を考えます。まず「生」、それから「死」、その後に「法事」の三つについてお話ししたいと思います。

上座仏教では十二縁起あるいは十二因縁ということが言われます。その十二縁起の中に「生」と「死」という言葉がでています。人が亡くなった時には、その人の前でこの言葉を唱えます。

アニッチャー ヴァタ サンカーラー、ウッパダヴァヤ ダンミノー
ウパッジトヴァー ニルッジャンティ、テーサム ヴーバサモー スコー
aniccā vata saṅkhārā uppādavaya dhammino.
upajjitvā nirujjhanti, tesam vūpasamo sukho.
サッペー サッター マリッサンティ、マランティ チャ マリンス ピー
タテーヴァーハム マリッサーミ、エッタ メー ナッティ サンサヨー
sabbe sattā marissanti, maranti ca marimsu pi,
tathevāham marissāmi, ettha me natthi samsayo.

この言葉の意味としては、「アニッチャー ヴァタ サンカーラー」(諸行無常)、生きているものはすべて移り変わり行く。「ウッパダヴァヤ ダンミノー」(是生滅法)、生まれてきているものはすべて滅するものである。「ウパッジトヴァー ニルッジャンティ」(生滅滅已)もし生まれてこなかったら滅することもない。「サッペー サッター マリッサンティ」すべての生き物(一切衆生)はやがて亡くなる、現に亡くなり、既に亡くなった。「エッタ メー ナッティ サンサヨー」これはもう疑えない事実だ……そういう意味です。この中で死あるいは生というものについて深い説明があります。

科学的には死というのは、目が見えない(瞳孔が開く)、言葉が出ない(呼吸しない)、脈がない(心停止)ということです。この三つをもって死というと科学の上では説明します。

ただ上座仏教では、その三つではまだ生きていると考えます。死んでない。なぜなら耳は聞こえているからです。あるときは、昏睡(coma)に入っているという言い方もします。

昏睡です。まだ亡くなっていない。上座仏教では、目が見えない、言葉も話せない、耳も聞こえない、息もしない、舌も動かない、皮膚も感覚がない、五根すべてが働かなくなれば亡くなったと言います。上座仏教は、最後まで耳が聞こえることを重視します。耳は聞こえている。見たところ亡くなっているような感じの状態にあるのですが、2時間ぐらいいは聴力が残っているらしい。耳が力を持っていることで、まだ亡くなっていないという判断をする。

例を挙げます。マレーシアで私は一人の女性に会いました。その女性は1か月ぐらいい昏睡の状態にいたと言います。病院に1か月間いて、オーストラリアのお坊さん（タイで出家した僧侶）がほぼ毎日その昏睡の状態にいる女性に説法を続けたのです。ということは、耳が聞こえている。昏睡に入っているけど、耳はちゃんと言葉を受けることができる。ただ体は動かない。

私自身の体験が一つあります。おなかの中に胆石ができて、時々痛むようになりました。それが癌になるかもしれないと言われる。そのためタイで手術を受けました。そのとき執刀医が私に言いました。「これからオベをします。もし痛くなったら声を出して」と。分かりましたと答えました。それから動かないようにするために麻酔の注射を打つのです。私自身は麻酔したことは分かっている。手術が始まると、「痛いですか」と訊いてきますが、痛くないといっても返事できない。自分は意識があり分かっているけれど、声を出せない。舌がすごく重たくて動かない。体も動かない。意識はちゃんとある。何を言っているか、聞いてわかっています。ということは、昏睡に入っている人は、実は聞いています。返事できないだけ。体が動かない。

マレーシアで1か月間昏睡の状態にいた女性に説法したというのは、瞑想（meditation）を導いたということです。日本でわかるようにいえば、たぶん禪ということになります。意識はしっかりしているので、その状態にある時に何かお説法みたいなことを言うと、心は穏やかになってきます。安心した安定の状態ができる。もちろん昏睡状態から亡くなる方もあるし、立ち直る方もあります。私がマレーシアで見た女性は1か月後に立ち直った方です。話もできました。

最近バングラデシュでもこんなことがありました。イスラム教の人が亡くなると、火葬ではなく、土葬をします。土の中に埋めるのです。埋葬後に、何日後かな、ちょっと日にちは忘れましたが、死んだ筈の人が起き上がったケースがありました。それは昏睡の状態にいたということです。昏睡の状態にいるのをお医者さんは亡くなっていると言いますが、それを仏教では亡くなったとは見ない。まだ生きていると見ます。個人的な意見ですけど、お医者さんの診断と仏教学として考えることに、少し違いが現れることも出てきていると思います。だから、死をどのように考えるか。大切なことと思います。

上座仏教の信者は、死にかけている人がいれば、いつでもお坊さんを呼びます。深夜の1時でも2時でも3時でも関係なく、病院であろうが自宅であろうが関係ありません。お坊さ

んは声が掛ったらすぐに走り出し、そこへ向かいます。着くとお経をあげる。日本では病院にお坊さんがいたら、ちょっと嫌じゃないかな（笑）。違和感があるようです。でもバングラではお坊さんが病院に行くことは、お医者さんたちも理解しているので全然問題ない。行ってお説法をする、あるいはお経をあげる、全然問題のないことです。病院へ行ってそれができる。

私が日本から帰国してバングラに住んでいるときに、2人ぐらいそういう経験があります。1人は学生のお父さんです。父が病気になったと夜12時頃に電話をかけてきました。「先生、お経をあげてくれませんか」ということです。私は「いいよ、どこですか」と答え、もう走り出した。行ってお経をあげたけど、亡くなりました。

こういうところを見てみますと、上座仏教圏のタイではまた違うかもしれませんが、バングラデシュでは、死にかけている人に対して、お坊さんがそこに行ってお経を唱え、その後その死にかけている人が生きているうちにどういうことをしたかを話しかけ、善い（kusala, 善）ことばかりを思い出させる。あなたはこういうことをした。こういうお布施をした。こういう善いことをしたではないか、橋を造ったとか学校を造ったとか、善いことばかりをそこで話す。そうすると、その人は善いことを思い出して、できるだけアクサラ（akusala, 不善）つまり悪いことを思い出さないようになる。

死に往く人に声を掛けてお話しする。目をつぶっているけど、声をかければ、音が聞こえるから、そこで精神が働きます。そうすると、その人はすごく穏やかになります。死ぬ人もありますが、死なない人はそういう善いことを思い出すと、心に力が湧きます。心に力が湧くと回復によいのです。薬だけではできないことです。

アメリカのはなしですが、75か所ぐらいの病院の中にメンタルセラピーという名前で瞑想の療法が取り入れられています。お医者さんができないことを担います。お医者さんは薬でできることは行い、薬で治そうとしますが、精神的なものは治らない。それは宗教者の仕事でしょう。宗教の働く場として見た方がいいと思います。

メンタルケア（精神的なケア）の実践者はだいたいアメリカ人です。東南アジアに来て出家してから座禅道場あるいは瞑想道場に通って、そのマスターとなり、母国に戻って還俗するのです。お坊さんではない。瞑想あるいは座禅は、病院の中では教えませんが、一応メンタルセラピーという名前をつけており、精神的なケアをすることになります。これは容易です。病院でメンタルセラピーという名前をつけて診療とは別の場所をつくって置いて、メンタルケアをするために人々にそこへ行かせる。瞑想や座禅を勉強しマスターした人たちがメンタルケアの場所へ行って、人々の心のケアもすることができのです。

また、お坊さんが行きたくとも時間がかかりすぐには行けない時には、在家の信者たちにそれを教えている。私が到着するまで、あなたがこの人に対してこういう話をしなさい。あなたができるお経をあげなさい。それをさせるのです。

今回、日本に来る2日前、93歳の長老比丘が入院されました。日本へ出かけることを報告に行き、そこでお経をあげました。お経をあげたところ、長老が別のお経をあげてほしいと言いました。そこで、私はまたそれをあげました。これは一般の人でも出家者でもどちらでもいいのです。上座仏教はお経をすごく信仰しているし、信用しています。死に直面している人に対して、そういうケアが必要ではないかなと思います。亡くなった後のことは、国によって文化が違いますからいろいろあります。しかし死に直面している人にとってそれが一番大切ではないかなと思います。亡くなったら、墓場を作るとか作らないとかは文化の違いです。上座仏教は、死に直面している人に対するケアが強いと言えます。

日本では病気になったら病院に行きます。そして病院で死ぬことが多い。その後遺体が自宅に戻るかどうか。亡くなった後のことですから、戻っても戻らなくとも、気持ちの問題ということでしょうか。自宅に誰か待っている人があれば戻るかもしれない。そうでない場合は、火葬場へ行って火葬して、そこでもう終わりということを聞いたこともあります。

『シンガーローヴァーダスutta』(Sīṅgālovādasutta 『善生經』)というお経があります。そのスuttaの中で、なぜ生きているときに、家(うち)をなぜ造るか。なぜ結婚するか。これについて説明がなされています。仏教的な説明。だから、結婚する前にお坊さんはそれを教えます。結婚する女性にも男性にもお話しする。なぜ家を造るか。これはみんな知っていることですが、思い出させるために言うのです。

例えばお経の最後のところですが、家を造る理由として次のようにあります。年を取ったらもちろん子供が面倒を見る。親の面倒を見る。亡くなったら葬式や行事や法事をちゃんと行う。その後も供養を行います。

そういうことを考えてみたら、発展ということとも関係してくるのです。発展している国では、これはどういう状態というのでしょうか。バングラでは重い病気に罹って死にそうになると、1週間か1日か2日後に亡くなるような状態になったら、お医者さんがその人の家族を呼んで言います。「この人はもうこれ以上生きられないから、自宅に帰ってお世話してあげてください」と。それで自宅に戻ってきます。病院では亡くならない。病院で亡くなる人は少ない。だいたい家族のところに連れていく。家族のところへ行ったら、もちろん家族が最期までその人の面倒を見るのです。

今は発展している国々を見ると、このあたりがちょっと冷たくなっているのではないかなと思います。人が亡くなりそうになっても、家族の人たちは忙しい。まあ、理由はいろいろあるでしょうが、そういうことを言うとは、死に往く家族に対する気持ちがあまりないのかなと思います。私自身が日本にいたときに感じたことです。

バングラでは、病気になって入院して死にそうになれば、家族の人を呼んで、自宅に戻します。もう治らないので、たぶんあとわずかの命、間もなく亡くなるかもしれない。だから自宅に連れて帰ってお世話してくださいと言う。自宅で孫とか子供とか、もうみんな、こ

の人をケアする。それが結構温かいことなのですね、家族の役割です。死んだ人ではなくて、死にかけている人に対するケアが多いです。

『マハーパリニッパナ・スッタタ』(Mahāparinibbānasuttanta (DN.16) 『大般涅槃經』)の中で、お釈迦様は、亡くなる一カ月前に自分はクシナガラにおいて亡くなると予言されました。クシナガラで亡くなった後に、火葬するか土葬するかというような様々なことが説かれています。

今の日本では亡くなった後に葬儀まで3日間ぐらいおきますね。バングラでは、朝に亡くなった場合には、たぶんその日のうちに土葬か火葬にします。夕方か夜に亡くなった場合には翌日になります。

次の日にお坊さんを招きます。お坊さんの数は家にもよるのですが、1人か2人か4人か5人か。1人でもいいし2人でもいい、何人でもいい。親戚や近所の人たちが集まって、招いたお坊さんから三帰依を授かり五戒を受けます。お坊さんたちは、始めに「アニッチャーヴァタ サンカーラー」を誦してから説法をします。そこでポイントとなるのが、それが亡くなった人に対してか、それとも亡くなった人の周りの人々に対してかということですね。

もちろんその話は亡くなった人に対するお話しなのですが、亡くなった人に向けていながら、生きている人々のためにも話すのです。この人は亡くなったが、生きているうちにどういうことをしたかを話します。

死に往く人に対してお話をして、周りの生きている人にその死に往く人のことを思い出させ、それで立ち直させる。たとえ悪いことをしたとしても善い方へ向かうようにリマインドするのです。

どちらかというと、それは生きている人々のためのお話になると言えます。死ぬまでは死にかけている人が大切。亡くなった後は、亡くなった人に向ってお話するのだけど、どちらかというと生きている人々が大切と言えます。

日本ではそれを儀礼と言うのかな、お葬式に出た後で自宅に帰るとします。誰かいれば、その人に塩を撒いてもらいます。体の上にこういうふうには塩を撒きます。あるいは水を撒くのかな。バングラデシュでは両方します。

バングラにはポップコーンみたいな米菓子があります。それを遺体の上に撒きます。白はゼロというような意味合いです。それを撒きます。それから、遺体を火葬場か土葬場に運びます。その時、葬列の前に人が立つのです。その遺体を運ぶ人が4人か5人か6人かいるとすると、その前にいる人がそのポップコーンみたいなものを道に撒くのです。なぜ撒くのかと言えば、明らかにするために、道を清めるためです。この人は亡くなっており、今ゼロになって清らか、ピュアと考えるのです。道中にも撒いて火葬場か土葬場へ行く。そこに参加した人はどうするか。参加した人はもちろんみんな死体の上にそれを撒いて、その後自宅に戻る途中に池があれば、そこで水を頭の上に注ぎます。また、自宅に入る前に、中から鉄製

の品物を出してもらって、それに触る。なぜなら、死者の靈魂か餓鬼かが葬儀に参列した人たちの中に入り込んでいるかどうか分からないけど、それをうちに一緒に持って入らないやうにと、その鉄で断つのです。餓鬼や魂とかは鉄が怖いみたいです。なにかわかりませんが鉄が怖いらしい。だから家の中には入らないことになっている。これに触れてから自宅に入るとされています。

その亡くなった人の家族はどうするかというと、自宅の屋根の庇から水が落ちるところあたりに鉄製の物を置きます。悪い靈魂が自宅に入らないように置きます。これは多くの家でやっていることです。

墓場に行った人たちの中に死者の長男がいたら、墓場のところで死者の頭を北向きにして、長男が火のついた薪を手にして死者の周りを歩きます。7回ぐらい回ります。回ってから、長男が最初に火を点けることになっている。私の父が亡くなった時には、私がお坊さんだったため、私の弟がやった。葬送には火葬と土葬の二つありますが、子供なら火葬をしないで土葬にすることが多い。また、亡くなる前に私を火葬にしないで土葬にしてくれと希望を言うこともあります。その場合は望み通りにします。普通には子供は土葬、大人は火葬にしていることが多いです。

火葬した後の供養や法事ということになりますと、バングラでは亡くなった次の日から毎日供養します。1か月間毎日供養をする。お坊さんを自宅に招いて、自分のお寺の和尚さんを招き、1か月ぐらい続けます。

5日か7日後、向こうではサンガダーナ (saṅghadāna サンガへの布施) と言いますが、それは4人以上の僧侶を呼んで供養をします。その後15日、その後が1月、その後3か月、その後6か月、その後が1年。1年が終わったら毎年、それがもうずっとたぶんその家族の人がいるうちではずっと続きます。

例えば私のおじいさんが亡くなりお父さんが亡くなっている。私たちはそれ（供養）が続く。ということはだいたいもう3世代は続くことになります。

一つのポイントとしてあるのは、例えば今日亡くなったとしたら、1年後の今日の前の日に供養をしてほしいと願うのです。後じゃなくて。今日が亡くなった命日としたら、その前日だったらいいのだけど、明日だったらだめ、そういうところにすごくこだわりがある。なぜならば生きていうちに供養をしなければいけないと考える。そうしないと届かないという信仰の問題です。ここにこだわりがあります。

だいたい事前に相談に来ます。こういうことでこういうふうになくなっているのですが、私たちは供養を前にした方がいいか、後でした方がいいか、どうでしょうか、と。だいたいのお坊さんは前にと言います。なぜならば、生きていうちに私は供養をできたということをもみんな心の中で信じているからです。死後に供養しても意味がないじゃないかというこだわりがある。そういうふうに通養ということが行われています。

プリント以外の話にまで及んでしまいました。ちょっと長時間になりましたが申し訳ありません。私のお話はこれで終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

シンポジウム

(司会) 武 田 龍
蒲 池 勢 至
嘉木揚 凱 朝
ギャナ・ラトナ

(武田) 武田と申します。今日はお忙しい中、研究所の40周年記念のシンポジウムにお出掛けいただきましてありがとうございます。

アジア仏教研究会は、2004年4月に、前田恵學先生の呼びかけで発足しました。「仏教における最高究極の価値とは何か」をテーマに、仏教学、哲学、文学などを専門とする幅広い研究者が集まり、学際的な雰囲気の研究會が始まりました。大乘經典の中でも身近な浄土三部經を読むことから出発し、各自が必要とする資料を持ち寄り、5年をかけて通読するうちに次第に熱を帯びた議論を交わすまでになりました。原始仏教の知識を基礎に、仏教の歴史的展開の中で大乘仏教の興起を理解し、浄土教の本質に肉薄しようと試みました。併せて現代の仏教信仰や思想状況も俎上に乗せました。本日お招きした嘉木揚凱朝さんとギャナ・ラトナさんは留学生として来日し、共に前田先生のご指導を受けて学位を取得された方たちです。日本滞在中にはアジア仏教研究会に顔を出していただき、随時、現地のリアルな情報を寄せてくださいました。お二人からもたらされる情報により、仏教信仰の多面的な様相を知ることができました。

浄土三部經を読み終えてから鳩摩羅什訳『法華經』(岩波文庫)を読み始めました。間もなく、2010年10月に前田先生がお亡くなりになり、続いて渡辺信和先生、箕浦恵了先生という研究会発足以来の中核メンバーが相次いで亡くなりました。私も他の役職の関係で時間を作るのが難しい時期があり活動が停滞するかと思われましたが、それも乗り越えて今では月に一度を原則に研究会を開催しています。法華經を読み続けて、今年は「化城喻品第七」まで読み進めました。

さて、これから「アジア仏教の死者・供養観」というタイトルでパネルディスカッションを行います。基調講演では3人の先生方にお話をいただきました。中国社会科学院の嘉木揚凱朝さん、バングラデシュのチッタゴン大学のギャナ・ラトナさんのお2人は現在それぞれの第一線で活躍されています。

本題に入ります。「アジア仏教の死者・供養観」というテーマです。死というものに向き合うということ。宗教者を含めてどなたでも死と向き合わねばならない場面に遭遇します。ところが、死は当たり前のこととはなかなか言いにくい。できれば避けたい事がらです。誰も自分が死ぬということを考えて毎日の生活を送っているわけではありません。でも、親族知友の死に遭遇します。その折には、葬送儀礼を含めて社会の現象面から現代日本の葬儀事情というような話題になることが多い。でもそれで話が終わってしまってもったいない。仏教が伝わったそれぞれの地域で行われている様態を知ることから始めて、仏教徒はどのように死と向き合ってきたのか、また現に死と向き合っているのか。そういうところから考えてみたいのです。それがこのパネルディスカッションの目的です。

そこで重要な点は、そもそも仏教は死に対してどのような考えを持っていたのかということです。釈尊は四苦を挙げて人間の根本苦と教えます。四苦とは生・老・病・死です。生まれること、老いること、病むこと、そして命が尽きて死んでいくことの四つです。これは誰もが引き受けなくてはならないことです。逃れられない、避けようがないということで、それを人間の根本苦と教えます。

生まれることはお誕生日というお祝いを考えがちですが、これも自分の自由にはならないということ苦なのです。そして老いるとは年を取ることです。人生の前半は成長と言って周りの人たちから褒められますが、その時期はすぐに過ぎて後半は衰えを実感する毎日ということになってきます。この会場におられる皆様も身に染みて感じておられるのではありませんか。

病気になること。注射を1本打ってもらえば治る、薬を飲めば治るということであればよいのですが、治らない病気に罹るのです。「死に病い」と言われます。死に至る病い、治らない病気のことで。たとえ長命を保ってもいずれは治らない病気に罹る。そして自分の人生も終わりに近づいたことに気づきます。医学が進歩したから心配ないとか、最先端の医療を受けられる保険に入っているから大丈夫と思っても、それは通用しません。

人はいつかは死ぬ。これは逃れられないことだ、と釈尊は教えていらした。これは否定しようがない。だから人間の根本苦であると教えられた。

それを踏まえて釈尊は、あなたはせっかくこの世に生まれたのだから、人に生まれたことをどう思うか、というところから追究が始まるわけです。そして、せっかく生まれたのなら人間として完成されなさいと道を説かれるのです。

釈尊はさとりを開いて仏陀となり、人として完成されました。仏陀であっても人ですから、命が尽きる日がやって来ます。仏陀にも滅度があるのです。無量寿ではありません。釈尊が死期をさと、「3か月後に如来は涅槃に入る」と決意され、最期の旅路につかれます。その行程がパーリ聖典の『マハー・パリニッバーナ・スッタタ』(“Mahāparinibbānasuttanta”『大般涅槃經』)に伝えられています。この『マハー・パリニッバーナ・スッタタ』は、釈

尊の最晩年の出来事の中でも、般涅槃の決意から、旅の途上で弟子や信者へ教化を続ける様子や心境の吐露を伝え、臨終から死に至る過程と仏陀の葬送の様子を語る經典です。でも仏教の葬送儀礼の教本や指南書ではありませんし、仏教徒の理想の葬儀を描くものでもありません。この経は仏教徒が仏陀である釈尊の死をどのように受け取ったかを伝えるものなのです。

長い經典の中に釈尊の多くの言葉が伝えられています。老いさらばえた自身の体を督励して歩みを続ける釈尊は、悪魔から「今こそ死ぬ時です」という囁きを受けたり、鍛冶工チュンダから供養を受け腹痛を起こすなど、自身の老いと衰えに責められます。それでも弟子たちに無常を教え、自らを抛り所とせよ、諸々の現象は過ぎ去る、怠ることなく自分の修行を完成させなさい、とたゆまず説法と教化を続けます。やがてクシナーラーにおいて最期を迎えることになります。長らく侍者を勤めたアーナンダ(阿難)とのやり取りがあります。アーナンダは師の亡き後を心配して尋ねます。亡くなられた後、師の遺体はどのようにすればよいのですか、と尋ねました。先生の遺体をどうすればいいのかと弟子は案じているのです。ところが釈尊の返事は、仏の弟子たちは(葬儀に)関わるな、というものでした。遺体の始末に弟子は必要ない。君たち仏弟子たちの仕事ではないということです。仏の弟子である君たちは、仏道修行の方に専念しなさいということです。正しい目的、自分の出家の目的にこそ邁進するよにという言葉を残されます。遺体の始末は、資産家の人たちが、つまり在家の人たちがやってくれるだろう。私に信を置いている在家の人たちがやってくれるだろう、と。そして彼らは如来の遺骨を崇拝するだろうというような言葉が続きます。

如来の遺体をどのようにすればよいのですか、とさらにアーナンダが訊きますと、釈尊は転輪聖王の遺体を処理するような仕方では如来の遺体を処理してほしいという言葉を残します。転輪聖王とはインドで求められた理想の君主のことです。法により世界を統治し、仁政を布くという理想の君主です。その転輪聖王の遺体と同じようにしてほしいという言葉を残されます。

その言葉に沿って釈尊の遺体の処理が行われたということになります。どんなことかという、細かいことになりますが、新しい布でくるむ、さらにその外周を新しくよく打った綿で包む。さらにその外を布で包むということで五百重に遺体を包んだ後で、鉄でできた油おけの中に納める。さらにそれを別の鉄の油おけで覆う。そして、いろいろな香木を集めて積み上げた薪の上に載せて火葬に付すというものです。当時の火葬の習慣がどの範囲で行われたのかは分かりませんが、『マハー・パリニッパナ・スッタナ』の記事は、釈尊が自身の遺体を火葬にしまさい、してほしいと弟子たちに語ったと伝えます。

そして、火葬の後はストゥーパを造り、そこで誰もが花や香などさまざまなものを捧げて礼拝できるようにしてほしいという言葉が添えられます。最期のお別れの言葉を発すると釈尊は息を引き取られますが、息を引き取ったからといってすぐ亡くなったわけではなくて、

さまざまな禪定の段階を踏んで最終的に涅槃に入られたと伝えられます。つまりこの經典では、息が止まり心臓が止まったから、これが死ですというようには書かれていません。弟子たちは師の心肺停止と意識の消滅は同時ではなかったと理解していたということです。

その後人々が遺骨を納めたストゥーパの周りに弓の柵とか鍬の垣根を作り、その周りで歌や踊りで讃嘆し、さらに音楽、花輪、お香を持って供養をしたということです。ストゥーパで遺骨の供養が行われた最初だと思います。『マハー・パリニッバーナ・スッタタ』の内容はこのようなものです。

釈尊の臨終の場面から葬儀にかけての出来事がまとめてあるのがこのお経です。これを頭の中に入れておいて、今日の先生方の話の方へ踏み込んでいきたいと思います。蒲池先生のお話にはさまざまな死者儀礼、また葬送儀礼ということが説明されました。日本における死者儀礼、死者供養、先祖信仰、死者が先祖になっていく過程を教えてくださいました。

そして嘉木揚凱朝先生は、死の前の生があることを指摘されました。生があって死があるということです。またお寺へ出掛けてお坊さんにお経を読んでもらうことが行われていると報告されました。

またギヤナ先生は、アーユサンカーラ (āyu-saṅkhāra) という生の素因となるようなものを持っているから、昏睡 (coma) に入るというようなことが起こった事例もあることを指摘されました。

これらのさまざまな行為を一つ一つ比較対照し検討することも興味深いと思いますが、今回はそんな時間はありません。どのように死に向き合うか。一つ特徴的なことが浮かんだのではないかと思います。

それは内モンゴルの仏教徒もバングラの仏教徒も、葬儀については同じような傾向がみられるということです。死者を送る葬儀では、死者を円滑に送り出したいと考えているようなところがあると思います。際どい臨終の場面でのことです。間もなく息を引き取ろうという時に、死にゆく人に話しかけるということが行われるとギヤナさんから報告されました。その人が生前に行った善いことをどんどん話し掛けて、人生は素晴らしかった、あなたは立派な人だったということを思い出させるということです。それは何のためかというと、この世に引き戻すためではなくて、次の生へ送り出すために話しかける。つまりよりよき再生のために心の準備をさせておくということがしっかりと報告されたと思います。

ところが日本の場合はそうではなくて、枕元で呼びかけるのは「逝ってはだめ」ということなのです。「まだ逝かないで」と呼び戻す方なのです。もう十分だから逝ってくださいという話ではない。そのあたりの違いが出たと思います。次生への送り出しと、現世への引き戻しということです。今日の報告では傾向として二つに分かれているように思います。蒲池先生、どうでしょうか。

(蒲池) 今日は私は葬式の細かなことは何も話しませんでした。比較をすると面白いことになると思いました。死者を送り出すというのは、30年、40年ぐらい前までの日本の葬儀の儀礼では、送り出す儀礼、具体的には絶縁儀礼でした。死者と生者とがそこで絶縁をして、もう早く逝ってくださいという儀礼なのです。

この尾張地方では、葬儀にあたりお酒を飲むことが行われていました。ハバキ酒と言います。旅に出るといような形態が反映していました。あるいは火を焚く。あるいは叩き出す。筵を叩くとか、この尾張でも古くはやっていたことなのです。茶碗を割ることもそうです。

その一方で死者への愛着があります。死者に対する哀惜の念です。それらをひっくるめて蘇生儀礼と言います。

ですからこれには両方あったということです。バングラデシュの場合でも、次生への送り出しとともに、死者を引き留めるような形の儀礼も、民衆にはあったのではないのかな、どうなのかなと私はお話を聞きながら思っていました。

(武田) 日本でもあったということです。最近はなかなかそういうことが見えてこない。

(蒲池) それは最近のことです。

(武田) 凱朝先生、中国でもまた内モンゴルでもそうだと思いますが、死者の肉体を鳥に食べさせるとか、生き物に食べさせる。この自分の遺体をささげるということになって、それがまたその人の次の再生、次の生を受けるときの有力な力になってくるというお話だったと思いますが、今でも皆さんは、そういうつもりでされているのでしょうか。

(嘉木揚) 私はモンゴル人ですが、モンゴル人としては、この肉体が死んだときには持っていきません。そのために必ずこれを動物たちに差し上げるのです。差し上げるということは、今でも冬には寒くて食べ物がないですね。だから人間が成仏するために必ず福德となるこの資糧が大事です。それを積まないと成仏できないです。

もう一つは知恵です。知恵を得るために必ず經典などを読んで修行します。また布施もあります。知恵の布施や無為の知恵、また説法の知恵があるでしょう、それがそろわないと成仏ができない。モンゴルでは布施や知恵は死者を成仏をさせるためにとても功德になるという考え方があります。

そしてチベットの方では全部この鳥たちに食べさせます。現代のチベットでは木材も少ないから、特に冬にはなかなか（遺体が）燃えてくれない。それも一つの原因だと立川武蔵先生に教えていただきました。チベット仏教とモンゴル仏教は同じ流れです。

この風習はバングラデシュから来ているのではないかと思います。遺体（人肉）を鳥に差

し上げることによって極楽に行くことができる。鳥に与えることは大きな功德になると考えています。遺体を食べやすくします。切って部分部分に分けると鳥などが食べやすくなる。それを行う特別な業者がいます。遺体を切る業者です。

医者が診察して死んでいると言いますが、仏教徒であればお経を読みます。3日間はかかります。3日後にはもう完全に亡くなります。亡くなった人が、生きていた時に、善いことをしたのであれば体が温かい。もし悪いことをしたら体が冷たいとか、そういうことは言われます。

そのため生きているときに行ったことがもうわかるのです。必ずそのお経を読んで資糧にしなければならない。お経の力によって極楽に行くことは必ずできるということで、それが信仰です。

モンゴルにおける浄土思想ということは、この生きている時にどういうことをするか、死んだらどういうことをするか。仏道を修行するためにはこの体が必要です。長く生きる必要があります。

それは欲望ではなくて、人々や社会へ果たすための役割というようなことから、命を長くする必要があると思います。この点については、無量寿経における儀式の中にも書いてあります。私は論文を書いて、人が亡くなる前にどういうことを行えば自分で極楽に行く力があるかということについても言及しています。

病人は自分でしゃべれなくても意識があります。南無阿弥陀仏のお念仏とかその人の信じのお経があれば、教える時間がない時には手渡すこともあります。観音菩薩の真言を唱えたり阿弥陀仏の真言を唱えることもあります、聞くことは、全部そこに書いてあります。死んだ人も実は聞いている。それによって極楽に行くことはできるというのがモンゴル人の考え方です。

お寺に行ってお坊さんにお経を読んでもらう。亡くなった人のためにお経を読むことはとても大事です。死者の家族や親戚や知り合いのために早く行ってやった方がいいと思います。モンゴルではそういうふうに行っています。

(武田) ありがとうございます。ギャナ先生、バングラでは重い病気になると病院にお坊さんが呼ばれるという話がありました。先生が頼まれて病院へ出向き、そこでお経を読むと間もなく病人が亡くなったということでした。病者に対してお経を読んでくださいという要望があります。バングラでお経を読んでくださいという場合、お経というのはパーリ語のお経ですね。その患者本人や周りにいる家族の方は、パーリ語のお経の内容はわかりますか。

(ギャナ) パーリ語ですので内容はわかりません。経典のバングラ訳はありますが、一般の人たちはパーリ語で書かれているお経の内容を知らないと思います。釈尊が生存中に病気

になったことがあります、その時、マハーカッサパ（Mahākassapa）長老が釈尊に対してお経をあげたことがあります。

またマハーカッサパが病気になった時には釈尊がお経を唱えたことが記事にあります。バングラでは伝統的に見て、お経の意味がわかっているかわかっていないかではなく、釈尊の言葉だから、お釈迦様の言葉だから、それを唱えてほしい、意味はいらない、ということだと思います。マントラ（Mantra 真言）という言葉がありますね。マントラの意味は、日本語では何と言えがいいのかな。マントラというものには秘密の要素があるのです。秘密のことがわかってはいけないみたいなことでしょうか。お経は秘密の内容を伝えるものではありませんが。

（嘉木揚） 真言ですね。

（ギャナ） ええ。お経は秘密じゃないけど、バングラ訳がありますから読めばわかります。しかし、読誦しているときには、たぶん聞いている在家の人々にはわからないと思います。それでもお経には病気に立ち向かう力がある、マントラには力があると考えています。その力を信用しているということです。それで聞いているのだと思います。

（蒲池） 死ぬ前にお経を読むということをお伺いして興味深いと思いました。ミャンマーで話を聞きました時に、亡くなる1分ほど前、まさしく死の直前のことです。その時に静かでない、善いところに生まれれないということを知りました。

（ギャナ） そうですね。

（蒲池） その時に心が錯乱して、心顛倒していると、どきっとしたら生まれるところも変わるということを知ったことがあります。臨終の一念ということですが。

（ギャナ） そうですね。

（蒲池） そういう一面もあるということですが、お経の中身よりも、それを受ける側の人々のことから言うとうどうでしょうか。

（ギャナ） その通りです。もちろんお経をあげると心が静かになり安定しますので、安定した時に亡くなれば、安定しているところに行くという信仰は持っているでしょう。それを信じているということです。だから心が穏やかになる、あるいは心が静かになることが目標と

してあります。そのためにはお経を誦えないといけない。一般の人はそれを信じています。音楽を聴いて心を善くしている人があるとしても、しかし音楽とお経では、その意味内容が違います。死にかけているのであれば、音楽にはあまり関心がないでしょう。私はそう思いますが、なかには臨終時に音楽の方に関心を持つ人がいるかもしれない。仏教を信仰している人であれば、死にゆく時にお経をあげて善いことを思い出させるのが一番でしょう。行き先としては、善い行き先になっていくということだと思います。

これはアビダルマ的には少し説明が必要になるのですけれども。何と言ったらいのかな。例えば「息をする」というカルマ (karma) という言葉があり、これにはチュティカルマ (cutikarma) とガティカルマ (gatikarma) の二つがあります。バングラの人々は臨終時の出息と入息を特に大切にしています。

枕元でお経を誦えると、善いことを思い出させて安定した気持ちになることで、その人の行き先が決まるとされる。それを信じているのです。それで行き先が決まるから、亡くなった時に、私も見たことがあるのですけど、死者の顔色がちょっと違う。

(武田) ありがとうございます。私たちが、今、勤めているものに枕経というものがあります。日本では亡くなってから枕経に来てくださいという話になります。かつてはその前に臨終説法というものがありました。死期を悟った方から亡くなる前にお話を聞きたいという希望が出されて、出かけていって枕元でお話をするということです。これから往生していくお浄土について少しでも聞いて心の準備をするためであったろうと思います。私は経験がありませんが、父には経験がありました。残念です。そういう経験をいつかはやってみたい。それを求められる人間になりたいと思います。

現代では枕経が亡くなってからの最初の法要儀式になってしまいました。それぞれの地域の伝統があります。私たちは、それをただ比較して似ているとか違うとかということではなくて、儀式の中に何が流れているか、そこに何が込められているかということをしっかりと確認したいと思います。

(蒲池) 今日出てこなかった問題に功德があるかと思います。今日のギアナさんのお話、私は最初の質問項目で、葬式を1週間以内にしますか、幾日目にしますかという問いを出しました。

ミャンマーでは7日目は最後の日という意識がある。スリランカでは1週間のうちは生きているという意識があると聞いたことがあります。そのために葬儀まで死者に食事を出し続け、食事の後には説法をするということです。その説法の意味は何かというと、それが死者に対して回向されるということのようです。善根を積む。人間が死んだら持っていけるものは功德しかないですよ、とミャンマーでも聞きました。そういう考え方がいろいろあるとい

うことはどうでしょうか。

(ギヤナ) そうですね。死後に葬儀まで5日か7日かあります。だいたい5日か7日です。もちろん5日の場合には5日間毎日布施をします。ご飯とかいろいろ献げます。自宅の仏壇にです。お寺へ行ったり自宅の仏壇に差し上げることをします。

バングラデシュの人々は、だいたい今のところは5日間やっているかな。7日間はなぜかという、たぶん武田先生がおっしゃったように『マハー・パリニッバーナ・スッタタ』に、お釈迦様が亡くなった後に火葬をいつするか。経典の言葉があります。それと関わっていると思います。7日間ぐらいこういう供養をした方がいい、と。

(武田) 『マハー・パリニッバーナ・スッタタ』の記事では、亡くなってから7日経ってからとあります。

(嘉木揚) 供養のことはレジュメの7ページ、8ページに書いてあります。どういうふうにすべきか方法を教えています。それを見ていただければ、死んだ人への供養の方法も書いてあります。

(蒲池) 今日のお話の中で、亡くなった後にお参りをするか、ということで孫くらいまではしますと聞きました。それから後はないことになります。どうしてないのかというと、私はたぶん日本とはこれが違うのだと思いますが、先祖や祖先の歴史、家と家系、家族と一族、そういう関係性が違うようです。親族関係の組織が違う形なのだろうと思います。だから孫まで。孫が終わったら、その後はもうわからなくなる。日本の場合はずっと繋がっている。繋がるところに先祖という考え方が出てきたと思います。

(ギヤナ) もちろん仏壇というものは、バングラにも一応あることはあるのですが、ただ遺骨を置くためだけに仏壇を作ることはないのです。そういう習慣がありません。遺骨を安置するために仏壇を作るという習慣はないのです。

供養の際に唱える「イタンゴヤキナンゴトゥーセキタンドヤートユクユク」という言葉は、「私たちがつくった功德を私たちの親戚、親類の人々のためになるように」という意味です。こういう言葉は使います。ですから、功德が親類の人々に、一代、二代、三代ではなく、わからないところまでずっと、その功德が届くように願ってやっています。

(蒲池) わかりました。

(武田) 時間になりました。話し足りないことも多いでしょうが、議論は深まったと思いま

す。これをもちまして本日のシンポジウムを終わります。ご清聴ありがとうございました。(拍手)

(司会) 先生方、本当にありがとうございました。会場の皆様、長時間にわたりましたけれども、最後までご聴講いただきましてありがとうございました。最後に所長としてごあいさつを申し上げたいと思います。

まだまだ話は尽きず拝聴したいところですが、時間となりました。今回のシンポジウムは研究所の40周年記念事業、また東海印度学仏教学会の2017年度例会として企画し、実施いたしました。ギャラリー展示も関連行事です。ぜひ観覧にお立ち寄りください。

この記念事業の開催に当たりまして多くの方からご高配をいただきました。まず前田恵學先生のご恩です。前田先生が、アジア仏教研究の国際的な進展を図ることを願われて、ご生前に私どもの研究所に対して研究資金をお寄せくださっておりました。今回はそれを使わせていただき、海外からお二人の現役研究者をお招きすることができました。40周年記念をこのような形で実現できましたことは、たいへんうれしく思います。ご参加いただきました皆様に深く感謝を申し上げます。ありがとうございました。(拍手)

今回は「アジア仏教の死者・供養観」というテーマでした。お話の中にもありましたように、仏教というのは死んでからのことではなく、いつかは死ぬ人間がどう生きるかということが課題である、そういった点を射程に入れながら、今回は3人の先生方にご発表をいただき、またパネルディスカッションをしていただきました。その成果につきましては来年度の研究所紀要にまとめて発表させていただきたいと思っております。ぜひご期待ください。

40周年を迎えました仏教文化研究所は、これからも「広く仏教文化の研究と興隆に寄与し、もって地域社会に貢献する」という基本姿勢を堅持して取り組みを続けてまいりたいと思います。今後とも研究所の諸活動にご理解とご参加を賜りますようお願い申し上げまして、この場を閉じさせていただきたいと思います。本日はどうもありがとうございました。正面の先生方にもう一度盛大な拍手をお願いいたします。(拍手)

〈シンポジウム終了〉